

NPO法人自然と緑

NPO 法人自然と緑 会報 2024 年 1 月 1 日発行 第 134 号

特定非営利活動法人自然と緑

代表者 伊藤 孝美

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

大阪市教育会館 (アネックス パル法円坂) 4 階

TEL : 06-6809-1700 FAX : 06-6809-2702

E-mail : info-sm@shizen-midori.org

URL : <https://shizen-midori.org>

【年頭の御挨拶】

新年明けましておめでとうございます

自然と緑理事長 伊藤孝美



2024 年を迎え、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

2020 年からの新型コロナウイルスの感染が昨年第 5 類の感染症に指定され、一応(?) コロナ感染は落ち着きを取り戻していますが、インフルエンザへの感染が多くなってきており、今後の様相が危惧されています。

さて、近年地球環境問題、中でも地球温暖化による気候変動が私たちの生存環境を脅かしています。昨年初夏から秋にかけて異常高温と異常乾燥(寡雨)被害が発生し、新潟県の一部地域では稲作が水不足で不作となるなど、日本国内ばかりでなく、世界的規模でも気候変動の影響が高まっています。

2023 年 7 月 27 日、世界気象機関 (WMO) と、欧州連合 (EU) の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス (C3S)」は、2023 年 7 月は「観測史上最も暑い月」になるという見通しを発表し、国連のグテーレス事務総長は同日の記者会見で「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代 (the era of global boiling) が来た」と述べ、各国政府などに気候変動対策の加速を求めています。

また、アフリカ大陸の北東部、「アフリカの角」と呼ばれる地域にあるジブチ、エチオピア、ケニア、ソマリアの 4 カ国を、長期的な干ばつが襲い、3 月に始まるはずの次の雨期にも、状況は変わらないだろうと予測されています。

IPCC が 2018 年に発表した「1.5 度特別報告書」によると、世界の気温上昇を 1.5 度に抑えるには、温室効果ガス排出量を 2030 年までに 2010 年比で 45 %削減し、2050 年前後に実質ゼロにする必要があると言い、また、2021 年 8 月に国連の「気候変動に関する政府間パネル (IPCC)」は、地球が人間の影響で温暖化していることに「疑う余地がない」と初めて断言しました。

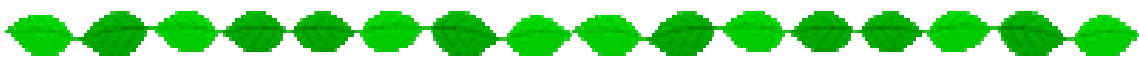
このように、すべての国が参加する温暖化対策の国際ルールは動き出したものの、気候危機を食い止められるかは不透明な状況ではありますが、私たちは私たちに出来る範囲でも地球温暖化防止の活動(過ごし方)をしていかなければなりません。

私たち NPO 法人自然と緑においては、自然大学での自然環境・生態系の学習、馬ヶ瀬山国有林の森林整備活動、斑鳩町里山整備、各企業の森の整備、自然観察会、河川探訪観察会、地学的むかし散歩等々を実践し、自然環境の保全(温暖化防止活動の一担)をしてきました。これらの活動も素晴らしい自然環境を孫子の代まで残してゆく糧になるものです。

「継続こそ力なり」という言葉があります。これまでと同様の活動を力と気力の及ぶ限り続けていくことが必要とされています。

会員の皆様、会員として継続をおねがいします(会費が自然と緑の活動の継続に繋がります)。

本年こそ会員の皆様が気軽に楽しく自然と緑の活動に参加が出来ることを願って、年頭の挨拶とします。



— 134 号目次 —

p 1	年頭の御挨拶	自然と緑理事長	伊藤孝美
p 2 ~ 3	渡辺弘之の未確認事件簿(16)大吟醸どこへ行った削った(磨いた)コメ	自然大学学長	渡辺弘之
p 3	会報川柳	自然と緑会員	神崎トモ子
p 4	さいとうさんの“話のタネ”(62)京都・大原・実光院	自然と緑前理事長	齊藤 兎三
p 5 ~ 6	27期自然大学 芦生研究林実習感想文(抜粋)		27期自然大学受講生
p 6 ~ 7	27期自然大学 琵琶湖博物館実習感想文(抜粋)		27期自然大学受講生
p 8	活動報告/編集雑記	自然と緑	会報編集部

渡辺弘之の未解決事件簿 (16) 大吟醸 どこへ行った削った (磨いた) コメ

自然大学学長 渡辺弘之

大吟醸

兵庫県網干のある有名酒蔵へ見学に行った。醸造に向くという播磨の酒米・山田錦を6割も削って作り出したのが、この大吟醸だと試飲をさせてくれた。削ったといわないで、これを磨いたというようだ。純米歩合ともいうようだ。山田錦は酒造好適米とされ、心白が大きく、タンパク質が少ないという特徴をもつそうだ。出来上がった酒は雑味がなく、すっきりとクリアな味わいと説明を受けたが、下戸の私にはそのちがいは十分には理解できなかった。酒米を6割も削って、すなわち、4割だけ残してつくったものが吟醸・大吟醸酒だが、吟醸と大吟醸のちがいは大吟醸は酒米・米麴・水だけが、吟醸酒はこれに醸造アルコールを加えたものだという。この差で味に大きなちがいがあるといふ。

有名なお酒「獺祭」の純米大吟醸にはラベルに「磨き二割三分」とある。お米を23%、磨いた(削った)ということのようだ。お酒は大吟醸・吟醸・純米酒・純米吟醸酒・純米大吟醸酒・特別純米酒・本醸造酒・特別本醸造酒の8つに分類されるという。このランクで値段が大きくちがう。呑み分けてのそのちがいは下戸の私にはわからない。埼玉県・秩父には大吟醸の上だという「吊し吟醸」というのがあったが、分類では大吟醸に含まれるのだろう。



純米大吟醸「獺祭」



吊し大吟醸「杵乃杜」

私は自他ともに認める下戸だが、気になって「下戸」を調べてみた。語源の一つは古い律令時代の階級で上戸には結婚式のお酒の配給が8瓶、下戸には2瓶と決められていたことによるという。貧乏家庭の家系ただけになるほどと納得できる。もう一つは中国、秦の時代、万里の長城の寒い丘の上の門を守る兵士(上戸)には酒が、平地の門を守る兵士(下戸)には菓子が与えられたことに由来するという。

杉玉(酒林)

新酒のできた酒蔵の玄関には緑の杉玉(酒林ともいう)が吊り下げられる。この杉玉の発祥は桜井市の大神神社であったとされる。スギの葉を集めて丸くボール状にしたものだ。これはもともとはいいお酒ができるようにとの願掛けだったようだが、現在では新酒の売り出しの合図になっている。しかし、この杉玉は色が変わっても次の新酒ができるまでぶら下がる。この色の変化もかつては熟成具合を表したとされる。現在のようにビン詰めでは変化しないが、昔の樽詰めでは時間とともに味は変わったようだ。新酒を好んだ人、熟成を好んだ人もいたようだ。この杉玉の色の変化も意味をもっていたのである。



杉玉→

うわばみ(蟒蛇)・ざる

大酒飲みをうわばみ(蟒蛇)、ざる、左党、酒豪、酒仙、辛党などという。蟒蛇とおろちとは大蛇のことだが、より大きなものをおろちといったようだ。それはともかく、うわばみは変じて、しばしば大トラになる。お酒の好きな方も高知では「少々いけます」などと謙遜してはいけない。ここでは「少々」は「升升」だ、大変なことになる。香南市赤岡町の「どろめ祭り」では大杯飲み干し大会がメインだ。男性は1升、女性は五合を飲み干す時間の競争である。男性では12.25秒の記録があるようだが、一気飲みでの急性アルコール中毒者はでていないのだろうか。それよりもお酒はゆっくり味わって飲むものだろう。実は私は若いころ、学生にからまれ、一気飲みを強要され、急性アルコール中毒で意識を失い、救急車で運ばれたことがある。1升ではない、湯飲み一杯でのことだ。

有名人にも飲めない人はけっこういるらしい。泉谷しげる、北島三郎、館ひろし、浜田雅功、蝶野正洋、水谷豊さんなどだ。テレビ番組「相棒」では水谷さん(杉下右京)は犯人をあげたあと、きれいな女将のい

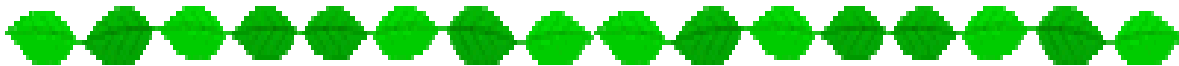
る小料理屋でいつも清酒を飲んでいる。これはどうも演技らしい。政治の世界では、飲むこと、一献が一票につながるのだろう。歴代の総理もみんな飲める人だったようだが、海部俊樹首相は全く飲めない人だったとされる。

米粉として麺類やお団子の原料

タイでは総選挙の前日は全国で酒類の販売・提供が禁止になる。コンビニでも売らないし、レストランやホテルで注文してもでてこない。違反し、摘発されると翌日の新聞に違反者の名前がでている、この取締まりはかなりきつようだ。タイの友人に聞くと、「お酒を飲まず、投票について真剣に考えろ」ということだと聞いたが、すぐあとで「飲ませて、票を買う奴がいる」といった。投票日前日夜に酒を飲ませる悪い習慣があったようだ。

本題に戻ろう。私が気になる、知りたいと思ったことは、7割も削った酒米の残りの行方だ。まさか下水に流してはいないだろうが、もったいないことだと思っていた。確かめると、これは米粉（上新粉）として、みたらし団子、おかき、せんべい、和菓子などに使われているという。もち米の粉は白玉粉とよび、これも団子などに使われている。私の好きな台湾のビーフン、ベトナムのフォーやタイのクエッテオなどの麺類も米粉からつくっている。お酒を飲めない私が食べる麺類やお団子の原料だった。

酒米は酒蔵で磨くのではなく、専門の製粉所で削ってくるので、酒蔵で削ることはないようだ。ネットで調べると、磨いた米は「飼料にする」とされていたが、それはまあ少々はあるだろう。多くは米粉として多様な用途に使われている。そのことを知り、磨いたあとのお米の行方のきびしい追及はやめた。



会報川柳

【これなんだろう・何故だろう】



この写真は、インドネシアのボゴール植物園で最も有名な、大きな板根の大樹が並んだ場所です。左がラワン、右がイチジクの樹です。何故熱帯の樹にはこのような大きな板根があるのでしょうか。（答は最終ページをご覧ください）

眠りからシフトチェンジをする夜明け 神崎 江

初日の出に限らず、東から陽が昇る情景は神々しいです。毎日が初日の出と思えば、いつも新しい気持ちになれるように思います。

しょうが湯を入れて絡まる冬の朝 神崎 江

生姜湯の効能はいろいろありますが、何よりもポカポカ身体が温まる。毎年、冬の朝はこれを飲みたくありません。

春までは心も寒くならぬよう 神崎 江

人生100年超時代。イキイキできなくてもご機嫌に過ごすことはできる。寒気に負けず、ご機嫌に。

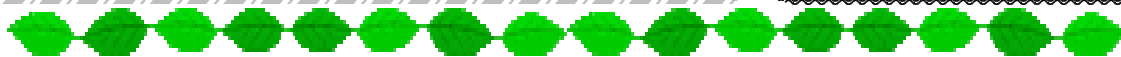
信じてもないけど食べる恵方巻 神崎 江

恵方の方角は「歳徳神」という金運、幸せを司る神様がその年にいる場所らしいです。2024年は「東北東」（正確には東より）。信じるというよりも願ってかぶりつく感じでしょうか。

本命に被せぬハートのチョココレート 神崎 江

二月のメインイベント。その昔、ピュアな気持ちで迎えたバレンタインデー。

※（神崎江（こう）は自然と緑事務局総務担当
同広報担当 神崎トモ子さんの雅号です。）



【御礼】いつもありがとうございます。（順不同、敬称略）

<切手、ハガキ、現金などのご寄付、他>

11 / 09 関澤友規子 切手

12 / 08 渡辺弘之 書籍（2種）



さいとうさんの“話のタネ” (62) 京都・大原・実光院

自然と緑前理事長 齊藤 悠三

京都 大原 三千院 恋に疲れた 女がひとり・・・と唄われた大原の寺院は見所がたくさんあるが、植物好きの方が行くには“三千院”の近くにある「実光院」がお勧めだ。実光院は天台声明(てんだいしょうみょう)の根本道場として知られているが庭が見事！約 150 種類の植物がある。



キッコウヒイラギ 2022.9.



キミノセンリョウ 2008.12.4

門を入った両側にキッコウヒイラギがある。これはヒイラギの園芸品種で葉に棘がなく葉の形が亀の甲羅に似ているところから名付けられた。坂を下るとオガタマノキ、一両、十両、百両、千両、万両がある。冬期に訪ねるとこれらの実が黄色く色づいて珍しい。あと百万両、億両があれば、『両』が勢揃いになる。億両は“ミヤマシキミ”の別名だ。



オケラの花 2022.9.15.



シロミノコムラサキ 2022.9.15.

見どころは客殿からの景色だ。部屋から池と泉を鑑賞できる「契心園(けいしんえん)」があり庭は回遊式庭園で散策できる。

庭園に出た右側に黄色い実の一両、十両、百両、千両、万両がある。散策路の左側にウメモドキの5本立ちがある。普通直径が 3 cm 位のものをよく見かけるが、この木は径 15 cm もあり他で見たことが無い太い木だ。



コムラサキ 2022.9.15.

2022 年 9 月に 5 回訪ねた。9 月初旬から下旬までオケラの花が咲いていた。野生はほとんど見なくなりましたが、二上山近くのドンズル坊と柏原市の寺山で見た記憶がある。植栽されているのも中々見ることが出来ない植物だ。

庭の歩道辺にコムラサキがある、この果実は幹の方から枝先に向かって色づいていく。シロミノコムラサキもあった。



ツルボ 2022.9.15



不断桜 2022.9.15.

不断桜(ふだんざくら)は、秋から翌年の春まで咲き続ける珍しいサトザクラだ。2022 年 9 月 10 日に 5 弁の白い花が 4 輪咲いていた。これから 4 月下旬まで咲きつづける。初冬と春の 2 回咲く“二期桜”、八重咲きの“十月桜”、一重の“四季桜”など各地に似たようなサクラがある。

池でコウホネの実を初めて見た。9 月初旬に時季外れの黄色の花を咲かせていた。9 月上旬にはサギソウとクロカミハナセキショウ、中旬にはホトトギスの斑入り葉の鉢植えが飾ってあった。下旬にはツルボの花が塀の上に咲いていた。この別名は参内傘(サンダイガサ)なので大原では別名で呼びたい雰囲気が漂う。



シロバナシュウカイドウ

シュウカイドウは桃花と白花が、ミズヒキも赤花と白花があった。サネカズラが青い実をつけていた。秋が深まっていくと大原の里はカエデが色づいて、きれいな紅葉が迎えてくれる。実光院は行く度に花の姿が変わっていた。年中、植物を楽しむことができるお寺だと思った。

第9回 芦生研究林実習—感想文(抜粋) 2022. 10. 15~16

渡辺 弘之学長(京都大学名誉教授)

《1班》

○念願の芦生の森に足を入れることができました。数十年前にトロッコ道をワクワクしながら歩いた時以来の核心部に入ることができ、飲める清流と大カツラやトチノキが接近していたのを見、強く印象に残っています。NHKの取材班が今年撮影したドキュメントも見逃さないようにしなければいけません。広瀬ガイドさんの写真撮影する切り口からの案内もおもしろく感じました。

○今回も好天にも恵まれ、芦生の森の素晴らしさを感じることができて最高でした。また、今回は泊まりがけということで、皆さんとの交流も最高に楽しかったです。あと、初の”蛭に血を吸われる体験”も良い思い出ですし、専任ガイドさんの説明も大変良かったです。色々な感謝の気持ちと共に、感想を記載させていただきます。

①陽樹と陰樹：長野ガイドから、”陰樹と陽樹”というお話を伺い、興味を持ちました。まず陽樹が森林を形成し、その後に陰樹が入れ替わって入ってきて森が成長するという点が、森の成長に関する内容として、とても面白く拝聴すると共に、陰樹であるブナに対する見方も少し変わりました。

【コメント】陽樹は十分な光のあるところで育つもの、パイオニアといわれるシラカバ、ヤシヤブシ、ミズキなど、一方、陰樹は日陰を好むというより日陰に耐えるもの、シイ、ブナ、タブノキなどです。たとえば、陰樹であるシイ林が成立すると陽樹は生存できません。が、陰樹の大木が枯れ・倒れた時、その隙間(ギャップ)に発芽・生育し、陰樹林にも陽樹が生存できるのです。陰樹と陽樹がモザイク状・パッチ状に存在します。どのくらいの明るさ(暗さ)で光合成できるかの値を光の保障点といいます。この値の低いものが陰樹です。

《2班》

○芦生の森の中に入ると、フカフカの土壌その下ずっと底から水が、森から川へそして海へ、魚が集まってくる。自然との共存、共生が大切だと思う。ブナの木一本ブリ3匹?とされているそうです。もっと時間をかけて歩いて見たかったです。

【コメント】この感想の下の記録には「木(ブナ)1本、ブリ1000本」とありました。3匹と1000匹、大きなちがいですね。聞いた耳のちがいか、ガイドの説明のちがいか?。山(森)、川、海が繋がっていることが理解されています。海の生物が山からのミネラルの供給に頼っているとすると、木を伐り裸にすればより多くにミネラルを供給できるはずですが、木を伐らないで森林を厳重に保護すればミネラル供給は少なくなります。海のための森林保護には少しご誤解があるように思います。日本のように急峻な所では雨は急流となってあっという間に海に出ます。この際、細かい粘土などを海まで運び、これらが海藻などに積もり、生育を阻害することの方が大きいのではないのでしょうか。より風化の進んだ東南アジアでは河口から半円状に泥が海に広がっています。

○ありがたいことに、両日お天気に恵まれての研修となりました。手つかずの森林の様子を実際に見ることができ、新しいことづくめでした。最も、驚いたのは、尾根伝いに杉がたくさん生えていたことでした。空から見たら、グリーンベルトのようになっているとガイドさんが言われました。田上山などのように、尾根道に松ばかり生えている山を思い出し、なぜ、松が生えていないかと尋ねますと、木地師さんが、いっぱい木を切ったところ(人の手が入ったところ)には、松が生えているということでした。「松がないのは、太古の森の証」ということもお聞きしました。あと、杉の「伏条更新」の様子も見せていただき、冬の2メートルの積雪の中を生き抜く戦略がよくわかりました。ブナについては、「木(ブナ)1本、ブリ1000本」の話をお聞きしました。魚付き林のことは、以前学びましたが、この言葉は、初めてで、森を整えてこそ、川や湖、海が豊かになるということを再確認しました。樹木だけでなく、林床の植生である、シダ類、キノコ類、地衣類もたくさんの種類に出会え、殴り書きの野帳を解説しながら、一つひとつ、確認していきたくと思っています。最後に、イタヤカエデの葉の揺れ方と、CO₂の濃度との関係の話も印象に残りました。これまで、日光を意識した葉の付き方も教わりましたが、風による葉の揺れ方にも、興味をもって見ていきたいなあと思いました。このように、たくさんの発見と共に、観察の新たな視点も教わり、本当にありがとうございました。

《3班》

○芦生は大変思い入れの深い場所です。生まれ育った事、成長の節目、節目で友達を連れて来たり、学童保育でキャンプをしたりしました。しかし自然大学の受講の中身を知るにつけ植物の多様性、動物との折り合い、気候変動、危機など視る視点がどんどん深まっています。伊藤先生から植物を一杯教えて頂きました。

た。夕食では皆さんと色々お話が出来て楽しかったです。またこの様な機会があれば良いと思います。ありがとうございました。

○芦生の実習もお天気に恵まれました。(27期は晴れ男、晴れ女が多いのか?) たくさんの草木やキノコ・苔が見られて、又、行きたいと思いました。今度はもっと覚えるはず・・・。(サルトリイバラだけは覚ええました)。山の家のお食事もおいしかったし、会話も楽しかったです。何よりも研究林を歩いていると気持ちがいい、幸せな気分になる、これに尽きます。これからも研究林を大切に守って欲しいと思いました。

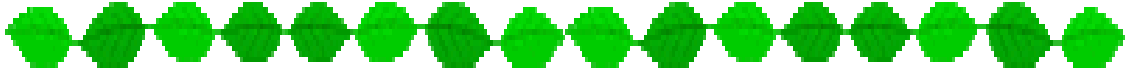


研究林事務所前で渡辺学長の話

灰野集落跡地で渡辺学長の解説

ブナノキ峠山頂で全員集合

下谷の大カツラ



第10回 琵琶湖実習—琵琶湖（淡水湖）の生態感想文(抜粋) 2022.11.6 琵琶湖職員、琵琶湖博物館の職員、伊藤孝美講師（教文部長）

《1班》

○今回も好天に恵まれ、素晴らしい野外実習を受けることが出来て良かったです。琵琶湖博物館も初めて訪問しましたが、とても数時間では回りきれないような様々な展示のある素晴らしい博物館だと思いました。その他、様々な思いがありますが、3件の感想を代表として記載させていただきます。①琵琶湖の”全層循環未完了”と世界の気候変動の影響：滋賀県の藤原さんからの講義で、琵琶湖の”全層循環未完了”の話がありました。この未完了現象自体はNHKで前に見て知っていたのですが、その原因について、”温暖化等の世界の気候変動が影響している”以外の何かより具体的な仮説等があれば、もっと知りたいと思いました。またお話の中で、”琵琶湖は地球環境を見通す窓”のお話は納得性があり、良かったかと思いました。②ミクロの世界顕微鏡を使ったプランクトン観察自体も大変楽しく感動的だったのですが、プランクトンの定義やプランクトンネットの使い方を教えて頂いたことも、貴重な体験でした。

○11月だということにお天気も最高でした。うみっこ広場では琵琶湖についてお話をしていただき、滅多に聞くことのできないことも聞けました。二班に分かれて最初に湖岸に向かい、ネットの使い方を教わりました。一人ずつネットを投げ入れてプランクトン採集しての観察では、どんなプランクトンに出合えるかと興味津々でした。ミジンコにも様々なミジンコがいるということが分かりました。普通には体験できないことができるという素晴らしさをつくづく実感しました。展示室では、淡水クラゲがとっても可愛く上下に動いており、海だけでなく淡水湖にもいるということを知りました。帰り際、木の根元にツワブキの花が咲いて黄色の花色が印象に残っています。またゆっくりと来ます。

《2班》

○午前中は200万年前の琵琶湖周辺の植生の再現林の見学。葉や果実の化石から樹種を特定するとの説明、メタセコイア、フウ、スイショウ、ハンカチノキ、イチイガシなどを見た。また伊藤先生からアスナロ、サワラ、ヒノキの葉の見分け方を教わりこれは絶対に自分のものにしなければと思った。スギ根株の埋没木の展示、これが地中で腐らず数千年も残っているとは驚きである。多分水位以下の場所にあったのであろうが百年二百年ならわかるが千年二千年と生木のままで残っているものなのだろうか。午後からはプランクトンを自分たちで採集して光学顕微鏡で見る。図鑑と同じものを見つけるとまた楽しからず哉。

○琵琶湖に水鳥がびっくりするほどいて、下見に行かれた一週間前と比べ急激に増えたとおっしゃっていました。オオヒシクイが食べる、ヒシやオニビシの実を見て歓声をあげた後、湖岸に座って、研修の冊子の表紙の写真と、目の前の風景を比較するように言われ、愕然としました。

2016年にハスが突然消滅したことを聞きました。見にも行っていなかった滋賀県民の私は、ええっ!と思いました、
「なんでやろう?」のままで、今日に至りました。今になって、ようやく自然に目を向けるようになり、自然大学にも入

ったことで、琵琶湖の植生の変化をこのような形で、見せていただくことができました。湖底の変化は、セタシジミが採れなくなったことも関係しています。

アカメ（マルバ）ヤナギが増えすぎて、ヨシの繁殖を妨げていることなども、最近になって知りました。滋賀県民として、まずは、現実を知らないと・・・と、思いを強くしました。後半、「プランクトン」の生存のための戦略を聞かせていただき、びっくりの連続でした。なぜ透明なのか？透けて見えるのは、戦略だったのですね。光合成をする方は、緑色を呈していましたが。植物の戦略は、観察会でも、よく教えていただくのですが、出会った生き物すべて、どんな工夫をしながら生きているのか、そんな観点をもって見ることで、学ぶことがいっぱいあるのだということに気づきました。

青い空が映る琵琶湖を見ると、「きれい！」とテンションが上がります。お年寄りから聞いた昔の琵琶湖を見てみたいなああと、いつも思います。今回は、自分に更にいっぱい返ってくる研修となりました。本当にありがとうございました。

《 3 班 》

○博物館周辺の植物、琵琶湖湖岸の生態の話、蓮の群生がかつて有ったが今はすっかり変わっている、色んな生物との共生が欠かせないとの推測。また田んぼにまつわる器具や他の説明は身近に体験していたので理解出来ました。午後の琵琶湖湖水の採取、顕微鏡での観察は大変楽しくもっと見ていたいと思いました。プランクトンの動く様子、少ない水滴に一杯うごめいている様子は感動でした。食物連鎖、何もかも連動して地球が造られていると感じられる時でした。博物館には再度訪れたいです。

○金剛山、馬ヶ瀬、芦生と、私にはどれも初めての体験で、10年早く参加できたらと思いつつながら、皆さんの助けをいただきついてこれました。木偏に無と書いて 樺（ブナ）で、あまり木材として役に立たない木でも水をたくさん含んで地中に贈るということを知り、春になるとすきとおるような緑の新芽をだすブナノキがだいすきです。なかなか低地で見れないのが残念です。金剛山では若いブナの木がないのがとてもショックでした。琵琶湖ではなぜハスがなくなったか、わかったら教えていただけたらと思っています。残り少なくなりましたが、頑張って参加致します。よろしくをお願いします。

産経新聞（2017/6/1）の記事から

ハスが群生していたのは同市の烏丸半島の周辺一帯（広さ約13ヘクタール）。昨年（2016年）ハスが急に姿を消し、市などが調査に乗り出していた。同市はさらに再生の可能性を探ろうと、「滋賀自然環境研究会」代表の小林圭介滋賀県立大名誉教授らに調査を依頼した。

小林名誉教授らは、約20年前の調査結果などとも比較し、消滅理由として、▽湖底の泥の中のメタンガスが増えた、▽湖底の土壌が、ハスの生育に適した粘土質から砂地に変化した、ことなどを新たに指摘。要因が複合的に関連していることもあって「（ハスが生育できる）諸条件をかつての状態に戻すことは不可能」などとする報告書をまとめた。



プランクトン採集の仕方の解説



プランクトン採集器を投げる



プランクトン検鏡観察



湖畔の生態の話聞く

◆ホームページが新しくなりました！

新しいホームページ（略：HP）は下記のアドレスでご覧下さい。

<https://shizen-midori.org> 検索の場合は「NPO法人 自然と緑」で検索して下さい。

なお、HP内ではFacebookも併設で、楽しい写真や情報満載です。そちらも是非除いてみて下さい。

◆メールアドレスが新しくなりました！

新メールアドレスのアカウントは下記になりました。

info-sm@shizen-midori.org の登録をお願いします。

【3 ページの答】



サキシマスオウノキ



カボック

板根 [Buttress (root)] は熱帯多雨林やマングローブ林の樹種などに多く見られる根の形態で、根が幹の基部からひだ状に肥大して、あたかも幹に三角形の支持板を当てたようになるものです。

根を深く張れない植物の地上部の支持に寄与するものと考えられています。呼吸根としての役割をもつ場合もあります。ラワン (フタバガキ科) やカボック (アオイ科) やサキシマスオウノキ (アオイ科) など熱帯の木本に多く見られます。

自然と緑の活動報告 2023年10月～2023年12月

◇ 10/28 (日) 地学的むかし散歩 第5回	17人
◇ 10/30 (月) 有志話し合いの場	04人
◇ 11/03 (金・祝) 斑鳩町産業祭り	11人
◇ 11/05 (日) 第28期自然大学室内講義「大気と気候」	43人
◇ 11/09 (木) 11月理事会	14人
◇ 11/11 (土) NTTドコモ奥島山 協力事業	08人+36人
◇ 11/12 (日) 第28期自然大学「琵琶湖博物館実習」	38人
◇ 11/16 (木) パソコンの保守契約前の打合せ	06人
◇ 11/18 (土) 斑鳩町里山整備	05人
◇ 11/19 (日) ステップアップ講座「経法大の山実習」	12人
◇ 11/21 (火) 大阪経済法科大学里山整備	05人
◇ 11/23 (木・祝) 自然と緑の自然観察会「高取城址」	27人
◇ 11/26 (日) 近江馬ヶ瀬山ふれあいの森定例活動	17人+09人
◇ 11/29 (水) クラフト研究会「クリスマスリース作り」	09人
◇ 12/02 (土) 斑鳩町の里山整備	12人
◇ 12/03 (日) 自然と緑の自然観察会「瓜生山～曼殊院」	32人
◇ 12/08 (金) 企画グループ打合せ会議	06人
◇ 12/09 (土) 武庫川探訪自然観察会「第7回」	18人
◇ 12/10 (日) 第28期自然大学室内講義「森林動物他」	45人
◇ 12/12 (火) 地学的むかし散歩 打合せ会議	07人
◇ 12/14 (火) 12月期理事会	14人
◇ 12/16 (土) ステップアップ講座「鶴見緑地」	20人
◇ 12/17 (日) 近江馬ヶ瀬山ふれあいの森定例活動	21人

NPO法人
自然と緑
ダウンロード方法



上記QRコードに
アクセスして下さい

★編集雑誌

☆正月のおめでたい葉として「ユズリハ」があります。注連飾りに「ダイダイ」と一緒に供えるが、どうして縁起が良い葉とされたのか。

☆「ゆずりは」は漢字で書く「譲り葉」で子の植物の葉は新葉が十分成長した時分にポトリと落ちて行くので、ユズリハと呼ばれたものであります。従って「ダイダイ」と併せて親から子へ、子から孫へと「代々譲る」と言われて、縁起がよい葉と言われる所以であります。

☆また、平安時代に中国から伝わった松竹梅が目出度いものとして飾られ、松と竹は寒中にも色褪せず、また梅は寒中に花開く、という「目出度い」ことの象徴と考えられています。本来の、中国の認識とは大きく異なっています。

☆その他ナンテン(難を転じる)、センリョウ(千両)、マシロウ(万両)、カラタチバナ(百両)、ヤブコウジ(十両)、アリドオシ(一両)などと、言葉をもじったり、赤い実を付ける「縁起物」として尊ばれています。

(ワンワン)